

俳句づくりは 生涯の生きがいです



長塚なかさん
(幸町・84歳)

自然観察が重要

俳句は日本人の自然諷詠^{ふうえい}として多くの人に愛され、江戸時代には松尾芭蕉や与謝蕪村、小林一茶などの達人を輩出しています。

この度、平成14年度NHK全国俳句大会において古河市の長塚なかさんが応募作品47,468句の中から特選(60作品)に選ばれました。そこで今回は、長塚さんを訪ね作品づくりや応募の動機などを伺いました。

「小さい時から、俳句を好きな心は持っていましたね。若いときは生活のために精一杯働いていましたので、趣味をする余裕はなかったです。俳句づくりを始めたのは40歳ごろからですが、最初は自分だけでやっていました。次に公民館の自主グループに入り、その後、昭和62年に二木会という会ができました。毎月第2木曜日に集まり、一人5句ずつ持ち寄り、仲間で評価し合います。また、春と秋には日帰りや一泊で吟行(他の土地に行き風景を見た

ぶんがくかん発
Vol.167

古河を舞台とした時代小説の秀作 乙川優三郎著「冬の標」

片町の大通りから白壁町へと折れると、道には天神町とは比べものにならない広い屋敷が並び、立派な門構えと土塀が続いている。明世にはそれだけでなくも眩しいところへ、漆喰の白壁が陽を弾いて目映いほどであった。顔見知りの門番に名を告げると、彼女は小門をくぐり、広々として美しい前庭を歩いていった。

昨年の3月5日から11月8日まで、「読売新聞」の夕刊に連載され、12月10日に出版された直木賞作家乙川優三郎の「冬の標」の一節を引用いたしました。

乙川氏の直木賞受賞後第1作目にあたる本作品は、古河という地名こそ出てきませんが、明らかに古河を舞台として想定して書かれた時代小説の秀作といえます。

時代は幕末、主人公は小藩の武家の娘明世で、13歳のころから画塾に通い絵の道に志を抱きま。しかし親の決めた結婚を拒むことはできず、嫁ぎ、子を成しますが、夫は若死にし舅もなくなり、姑とひとり息子を抱えて苦境に立たされます。このような状況に置かれても絵に対する情熱を失わず、今度こそ絵の道をつかみ

おとかわゆうざぶろう しのべ

とろうと新たな一歩をふみだすのです。作品では、画塾の塾頭である葦秋や塾の仲間修理や平吉との心の交流が丁寧に描かれ、静かな感動を呼び起こします。また、この小説は、城下町古河を舞台としていると思われませんが、主人公の明世もどこか古河にゆかりの深い南画家の奥原晴湖をイメージさせられるものがあります。

著者の乙川氏は、昭和28年2月17日千葉県生まれ。本名は島田豊。千葉県立国府台高校・ホテル観光業の専門学校を卒業後、国内外のホテルに勤務。会社経営、機械翻訳の下請を経て平成8年「藪燕」で第76回オール読物新人賞、翌9年『霧の橋』で第7回時代小説大賞、平成13年には、『五年の梅』で第14回山本周五郎賞を受賞しています。

また、直木賞関係では、平成10年『喜知次』が第119回候補に、平成12年『蔓の端々』が第123回

候補に、平成13年『かずら野』が126回候補となり、平成14年『生きる』で見事第127回直木賞を受賞しました。今後の時代小説を背負っていく作家のひとりである乙川氏の活躍を期待したいと思います。



「冬の標」中央公論新社刊